

詩心をさぐる旅

馬場あき子

歌枕をたずねて



角川選書

121

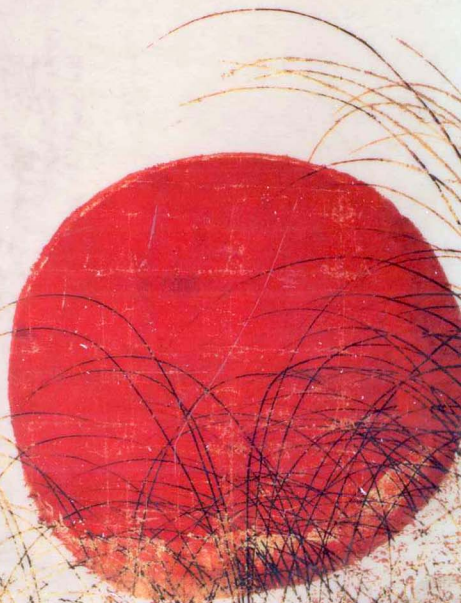
古来、無数の歌に詠みこめられてきた諸国の名所景勝。たとえば京の賀茂・桂、

須磨・明石、あるいはみちのくの松島……これら「歌枕」は、今日では荒廃しきり、

かつてのおもかげをしのぶすがもない。著者はしかし、もはや「あとかたもない

非在の場所」となっていればこそ、古人がたどった「心の旅路」にならい、歌枕探訪の旅に出る――

千年余、歌びとたちが継承してきた憧憬と詩魂に現代の詩心・想像力を架ける、絶妙の紀行エッセイ。



歌枕をたずねて

昭和五十六年二月二十八日 初版発行

著者——馬場あき子

© Akiko Baba 1981

Printed in Japan



発行者——角川春樹 発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三・三三 郵便番号〇三

電話東京三・三三・七二（大代表） 振替東京二・九五〇八

装幀者——杉浦康平 協力——鈴木一誌＋杉浦富美子

印刷所——信教印刷株式会社 外装印刷——旭印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります

落丁・乱丁本はお取り替えます

0395-703121-0946(0)

をたずねて

角川選書

*

歌枕をたすねて

馬場あき子

目次

非在の風景の中で——七

そのかみ山の賀茂の里——二七

桂の人を思ふとや——二九

淀の若菰かりにきて——四二

若紫の摺り衣——五三

ささなみや志賀のみやこは——五五

さくら咲く日にまうできて——五七

落ちても波はかへるなり——六九

関の清水に影見えて——一〇一

不破の関屋の板びさし——一二三

伊勢の浜荻折りふせて——二五

わくらばに問ふ人あらば——二七

松の木間よりながむれば——二九

み熊野の浦の浜木綿——二六

色ばかりこそ昔なりけれ——二七

また越ゆべしと思ひきや——二八

沖の小島に——二九

多摩川にさらす手づくり——三〇

若かへるでもみづまで——三一

いかで都へ告げやらむ——三二

影さへみゆる山の井の——三四

みちのくはいづくはあれど——三五

朽ちもせぬその名ばかりを——三六

歌枕の道——二九

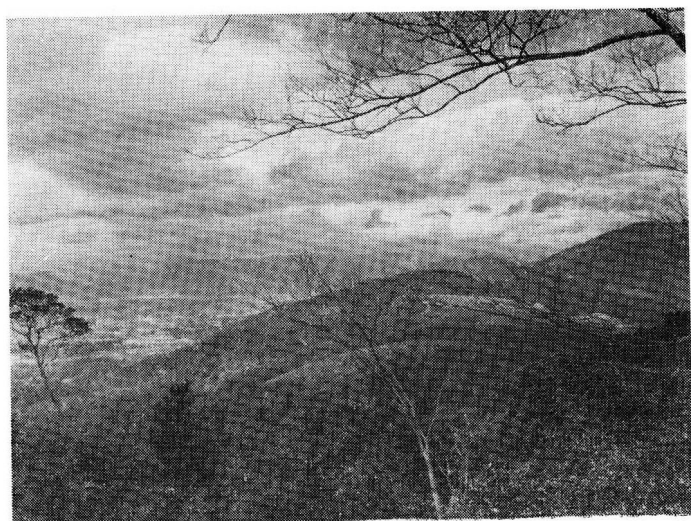
あとがき——二六

写真提供

長谷章久

ほか

非在の風景の中で



京都・伏見 深草山

歌枕——それは古来、多くの歌人によって和歌に詠じられてきた名所である。

たとえば須磨、たとえば逢坂、はるかなみちのくの千賀の塩釜あるいは筑紫の松浦瀉。しかし、

現代ではもはや、それらは心ときめくあこがれの地などではなくなってしまった。

文明の発達は、大きかった地球をしだいに小さくしてしまったといった人があったが、そうした現象は、この小さな日本という島国においては、いっそう無惨に進行した。いま、名所、旧跡、景勝のたぐいは行楽の地となり、その連想として脳裏に思い浮かべるものは、散乱する紙屑や塵芥の放つ悪臭、ジュースのあき罐、人ごみと疲労感と、腹だたしい空しさ等々である。

いわば勝地歌枕とは、まさに名実ともに滅びきって、現代にはあとかたもない非在の場所であるのだ。

にもかかわらず、いや、それゆえにといった方がよいかもしれない。私はこの頃しきりに歌枕への旅という郷愁にかられる。一枚の地図を広げて、自在に指にたどり、目に追うその非在の地は、いまなお白砂青松、山紫水明、あきあきするくらいの年月を降り積らせて、ふしぎなしずけさともにある。そして、かの惨憺たる現実と直面しないかぎりには、その甘美な、美的連想をよび起す快い韻きをもった地名を舌頭にころがすままに、それはなつかしい心のふるさとして、の抒情を甦ら

せ、まるでみずやかな思想のように顯^たちあらわれる。いったい、そうした地と、地へのつながりを何とよんだらいいのであろう。

この、ふしぎな絆^{きずな}に結ばれたまま、累年の親愛とともにある非在の地への郷愁は、あるいはかつて、「居ながらにして名所を知る」と、詩心を誇った歌の心そのものへの郷愁なのかもしれない。

旅行をする機会はきわめて多いが、なぜかそれは「旅行」という、どこか事務的な日程に追われた時間であって、「旅」という味わいにみだされることが少なくなってしまった。そうした旅の味わいが何にさまたげられているのかを考えてみると、点から点への移動という、この旅の本質的過程にほとんど風土感がなくなっているせいではないかと思われる。旅行ということの中には、もちろん、点から点への過程が含まれていないわけではないが、その過程はきわめてすみやかで、そこにはただあわただしい移動の心と目が、人という主体をはなれ、目的地への短絡のみを求めているようだ。

「くたびれて宿かるころや藤の花」と詠じたのは芭蕉^{ばしやう}であったが、この「くたびれて宿かる」という行程によってはじめて、旅中の「藤の花」はいきいきとした表情をもって問いかけてくる。旅について、それは「遠さを味ふ」心だといったのは三木清であったが、この芭蕉の夕暮の藤の花も、三木風にいえば、日常から離れて漂うはかな浪漫的性情の中で、優しく人めいた一世界を獲得しているといえるだろう。しかしながら、現代において、旅と人生を重ねて詠歎することなどは、もはや陳腐^{ちんぷ}な感慨になってしまった。そして、旅はきわめて安易になり、他人まかせになり、その、

移動の過程がもつていた旅の心は、ようやくその本質を失おうとしている。

それはちょうど、われわれの風土がまだ豊かな未知の天地にめぐまれていたはるかな過去、都として開けていた山城や大和の盆地に住んでいても、一生のうちに海を見る機会をもつことなく、人伝への語りごとや、詩歌をとおしての空想の中で、架空のイメージを育みながらそれでも海の広さや波しぶきの美しさを歌った歌人たちがいたことと、全く逆な現象だといえるだろう。そして、歌枕とは、そうした旅の困難にみちていた時代の、詩的あこがれの中にあつた地であり、多くの先人の詩歌の重なりの中に育まれた心の旅路なのである。

歌枕に関心がもたれるようになったのはいつ頃からであろう。歌僧能因のういんの『能因歌枕』は、国々別に古歌にうたわれたなつかしい地名をかき分けた覚えがきのようなものだが、それより早く『枕草子』の中にも、清少納言せいしょうなごんに好まれた歌枕の名が「山は」「峯は」「原は」「淵ふちは」「海は」というぐあいに、項目別に二十数段にわたって散在している。

それらを見ると、歌枕は勝地や風土としてよりも、むしろ詩語としてのいくしみに近い。たとえば山の段では、「小倉山おぐら、鹿背山かせ、三笠山みかさ」というような文芸的にも著名な山々につづけて、「このくれ山、いりたちの山、忘れずの山」などが登場する。今日、どこにあるのかもわからない山々だが、これらの呼び名は詩語としての美しさに加えて、さらに、呼びならわした人の情もしのばれるという優しさのこもる愛称である。

あるいはまた、清少納言は池についていう。「贅野にえのの池、初瀬はつせに詣でしに、水鳥のひまなくゐて、

立ちさはぎしがいとをかしう見えしなり」と。それは「贅野の池」という名の異様に合せて、まるで御贅みぜいの鳥のように棲みついてゐる水鳥のさまが、心をばつと楽しくさせたのだろう。それとも一つ、この場合清少納言は「初瀬に詣でしに」という現実の旅の中にあり、晴ればれとした解放感とともに情景を享受していたのだ。そうした場において「贅野の池」という名は、豊饒ほうじょうな満足感とともに「をかし」に結びついていったのである。

あるいはまたいう。「猿沢の池」は、帝の寵衰ちようすいえた采女うねめが入水した哀れな故事によって賞翫しょうがんされる池だと。また「はらの池」という、名称としては何の詩性も美しさもない池については、「玉藻な刈りそといひたるもをかしうおぼゆ」といつてゐる。それは「鴛鴦おし」という風俗歌の、「をし、たかべ（小鴨）、鴨さへ来ゐる、はらの池の、や、玉藻は、真根まねな刈りそや、生ひもつぐがに、や、生ひもつぐがに」という歌謡の一ふしを愛するゆえになつかしいのである。あるいはその一ふしを、清少納言が忘れがたく記憶に残した時か、所か、誰かがあつたと考えてもよいだろう。

いずれにしても、この『枕草子』の名寄せ風の段には、歌枕が発生する条件のすべてが出そろつてゐる。そして、こうした歌枕へのなつかしみは、しだいに現実の風景を越えて、うたい重ねられた詩歌の情緒への愛となり、うたった人々への親愛となつて、いつしかそれは、全く架空な天地の風貌を帯びてゆきはじめる。

この世の現実には絶望して、伏見、日野山の奥に隠遁いんとんした鴨長明かもものちやうめいの心を最もなぐさめてくれたものは、いつの世にもその清澄明媚めいびなたたずまいを変えない自然の姿であつたが、それではたして自然

の力のみによって可能であつたのだろうか。長明は水辺を往来する船を眺めても、昔、沙弥満誓が詠じた歌を思いだすことによって、同じような心で世のはかなさを詠歎しようとしたし、また散策の足を延ばしては、「もし、うららかなれば峰によちのぼりて、はるかにふるさとの空をのぞみ、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師をみる。勝地主なければ心をなぐさむるにさはりなし」といつてゐる。

なぜにまた、木幡山であり、鳥羽であり、伏見の里であるのか、答はもちろんきまつてゐる。これら歌枕の地をながめつつ、長明がその心を満たされたのは、その地を詠じた故人への文芸的情愛が深かったからである。「勝地主なければ」ということばに托して、その心を無限にうけ入れてくれる勝地への自在な愛を語るとき、長明のような世捨人にとって、その愛はしばしば捨てはてた世への抗いの心を含み、関心はさらに発展して「蟬歌の翁があとをとぶらひ」「猿丸大夫が墓をたづぬ」としだいに拡大されてゆく。そして、その歌書『無名抄』の中では、貫之や業平、喜撰や周防内侍の家のあとをはじめ、人丸の墓まで追尋して考証を加えたりしている。この、どこか自愛の心にさえ通うと思われる旧跡への情の動きもまた、歌枕へのなつかしみと別なものとは思われないのである。

しかし、文芸的な歴史をもつ歌枕へのなつかしみという方向も、覚めた目でみれば時には滑稽にうつることがないではない。たとえば摂津の国長柄川に架かる長柄の橋を例にしてもよい。嵯峨天皇の弘仁三年（八二二）という古い造営の記録をもつ名橋だが、仁寿三年（八五三）にはすでに崩

壊して人馬の交通が絶えたとある。『古今集』によみ人しらずの歌として「世の中にふりぬるものは津の国の長柄の橋と我となりけり」の一首があるから、その後も修復され、さらに歴史を深めつつ交通の要所となっていたのであろう。

そして、『古今集』以後の時代の中で、しだいに老朽し崩壊してしまうのだが、すでに多くの歌人の思いを宿しすぎたこの橋は、詩歌の世界では滅びることができなくなり、えんえんと中世までの詩語としての生命を保ちつづける。この橋がこうして全く詩の中の橋になりきってしまうまでの過渡的な時代には、この橋の保つ文芸的由緒の過重さゆえに、いろいろとおもしろい話が多く残っている。

まず『宇治拾遺』は神祇伯康資王じんぎはくやすけみうの母の話。ある日仏供養のため、興福寺の永縁僧正えうえんそうじょうを請じて法要をいとなみ、数々の布施を出したが、その中に紫の薄様うすようの紙に包んだ小さな品が一つあった。僧正が何かと思つてあけてみると薄ぎたない木の切れっぱしで、ただ、美しいその包み紙には歌が書いてあった。

朽ちにける長柄の橋の橋柱法のきのためにも渡しつるかな

大切に秘蔵してきた長柄の橋はしの橋柱だが、法事の布施として呈上しますというほどの意味だが、仏の開眼供養に「渡す」ということばは優しく作用して、仏の住む彼岸のこととも思われてなつかし

い。ところが、翌日、僧正のもとを訪れた若狭阿闍梨覺縁あじやりかくえんという僧、これは歌人でもあったので、さては橋柱のことをききつけたかな、と思っていると、うやうやしくふところから名簿みようぶ（服従のしるしの名札）を引き出して僧正の前に提出し、この身一党の服従と引きかえに橋柱の断片を譲ってくれという。僧もまた、「これほどの宝をどうして譲れよう」と拒みとおし、ついに覺縁も諦めて帰っていったというもので、「好き好きしくあはれることどもなり」という著者の評語が加わっている。この批評をみても古い歌枕への愛惜や執心はいささか異様であって、その熱っぽさは一つの文芸的風潮を支配していたと思われる。

そして、異様といえど何といっても能因と藤原節信の話であらう。はじめて両者がまみえ、語った日、能因は懷中から初対面の引出物と称して錦にしきの袋を取り出したが、中には一筋の鉋屑かんなすが入っていた。能因は「これは私の重宝にしている長柄橋の鉋屑で、まさしく造立のときのものです」と説明する。これを聞いて喜んだ節信もまた懷中からおもむろに一包の紙包を取り出して進呈するので、開いてみると氣味の悪い蛙かわずのミイラであった。ところがこれがまた、歌枕として名高い山吹の里、山城の井手の水辺に、かつて美声をひびかせて人々の詩情をさそったといわれる井手の蛙かわず（かじか）のひからびた姿だったというものである。兩人はこの宝物に感歎しあい、各々これを懷中して別れたのだが、著者の清輔きよほけは、「今ノ世人、嗚呼おほこト称スベキカ」と微妙な詠歎を添えている。著者清輔は決して嗚呼とは思わなかったのであらう。

行末を思へばかなし津の国のながらの橋も名は残りけり

何事もかはりゆくめる世の中に昔ながらの橋柱かな

としより
源俊頼

どうみよう
道命法師

そして、長柄の橋はついに名のみ残って、身の行末とくらべてかなしまれたり、「昔ながらの長柄」という掛けことばの中で変らぬ心をたしかめるように眺められたりしながら、その時間の累積にふさわしく歌人の詠歎も累積していったようだ。

鎌倉時代には、後鳥羽院^{ごとばいん}が、熊野参詣^{さんけい}をはたした御礼参りに住吉に御幸されたことがあったが、折ふし長柄に宿られたのであった。院は昔の長柄の橋はこのあたりかと感慨深げに夕景を見渡していられたが、御前の人々の話題も当然そのことで、たまたま御前に伺候していた少将雅経^{まさつね}が、「じつは長柄の橋の切れ端がわが家に宝蔵されている」、といい出した。真偽のほども疑わしいと一座は騒然となったが、雅経は弁明して、長柄の辺に昔から家のあった滝口の侍がおり、ある日舟で川を下るときに底に当たったものがあるので、それを掘り出したところ、まがうかたなく鉄の打ちこまれた橋柱の名残りであったという。

帰洛ののち直ちに献上されたその朽木はかなり大きなものであったらしく、後鳥羽院はそれを貴重な品として扱い文台につくりかえて、開設した和歌所の中心に据^すえた。この後鳥羽院の処置は、多分に意図的、あるいは意識的ともいえようが、その意識はまた、よく後鳥羽院の思いを代弁して感動的である。ここには、「真偽のほど」という合理論争をやんわりと退けて、にせものの以外には